漂流 Drifting | 屏東.台湾 Pingtung County, Taiwan | 2016

還流・帰還

沈昭良写真展

シン・ショウリョウ

2024.09.17(火) —— 10.15(火)

Return and Backflow
Shen Chao-Liang Photography Exhibition

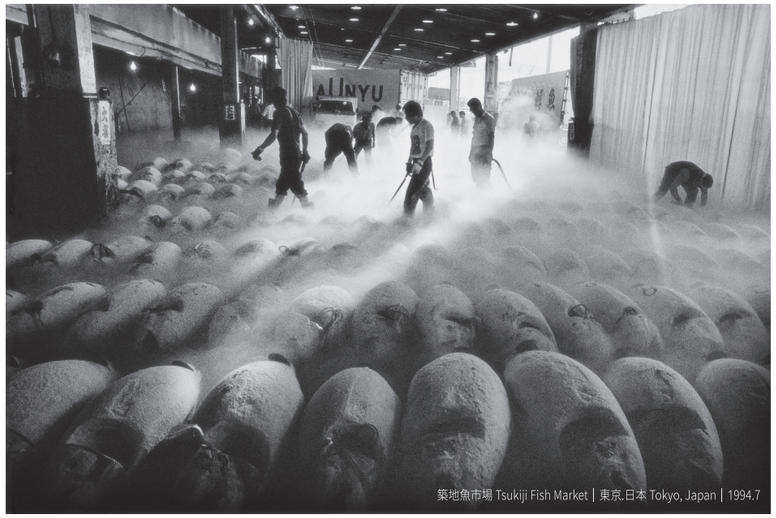
築地魚市場 Tsukiji Fish Market
STAGE 舞台車
漂流 Drifting

東川町文化ギャラリー HIGASHIKAWA BUNKA GALLERY

東川町文化ギャラリー：北海道上川郡東川町東町 1-19-8
10:00-17:00 入館料 | 500円※ 無休 | TEL：0166-82-4700
※中学生以下無料

キュレーター：

菅沼比呂志 | 武蔵野美術大学 教授
沈裕融(シン・ユウユウ) | 華梵大学 助教授



築地魚市場 Tsukiji Fish Market｜東京,日本 Tokyo, Japan｜1994.7

★30年前の1993年、東京に留学中の私は人生で初めての写真プロジェクト ――「築地魚市場」シリーズに取り掛かっていた。その後、台湾にもどり新聞社に入社してからも、毎年のように東京へ赴いては撮影を続け、1995年より「映像・南方澳」(Reflections of Nan-Fang-Ao)シリーズに着手した。南方澳漁港は日本の植民地時代、台湾東部に造られた有数の港町である。2001年からは「玉蘭」に焦点を当て、それに連なる花き産業、民俗、土地や生命をイメージで繋ぎ合わせた。2005年から開始した「STAGE」、「SINGERS & STAGES」や「台湾綜芸団」という3つの異なる形態をもつ作品シリーズでは、多様な文化を体現する台湾娯楽産業に迫った。

STAGE 舞台車｜STAGE #120｜雲林,台湾 Yunlin County, Taiwan｜2014

あのころの台湾では、写真分野における教育や制作、展示の環境、働き方について抱くイメージは、自分自身も含めてかなり限られたものだった。写真を志す多くの人にとって、写真に近づける唯一の方法は、カメラを背に現場へ駆けつけることだった。現像タンクに自らを浸し、おのれの姿を現像するような努力を重ねたものだ。

2008年以降は、《玉蘭》(YULAN Magnolia Flowers / 2008)、《築地魚市場》(Tsukiji Fish Market / 2009)、《STAGE》(舞台車 / 2011)、《SINGERS & STAGES》(歌手與舞台車 / 2013)、《台湾綜芸団》(Taiwanese Vaudeville Troupes / 2016)といった長編写真集を立て続けに出版した。そしてまた、近い将来の出版計画として、薬物依存症のための民間リハビリ施設を撮影した「晨曦–來自戒毒村」(Dawn-from the drug rehabilitation village / 2018)、かつて独裁体制下にあった台湾で政治/思想犯を投獄し拷問した場所を記録した「暗夜幽光 威權歷史遺址–安康接待室 / 新店軍人監獄」(Shimmering Lights in the Dark Historical Sites from the Authoritarian Period - Ankang Reception House / Xindian Military Prison / 2020)、歴史・事件・社会問題や紛争といった文脈を礎に台湾自身の経験をナラティブ・ランドスケープとして紡いでいく「漂流」(Drifting / 2015-2024)といったシリーズがある。

思い出は人を溺れさせるし、言うことは容易い。とはいえ、来た道を振りかえり、30年にわたって異なる現場を行き来するなかで保ちつづけた情熱と初心を確認し、自らへの励ましとしたい。まず、今回の東川町文化ギャラリーの個展では、古典的リアリズムともいえる「築地魚市場」、暗く華やかな「STAGE」、また、混沌と叙情の交じり合った「漂流」という3つのシリーズを展示する。消え去った築地の風情や台湾のステージトラックなどの庶民文化を記録した一方で、台湾の過去・現在・未来の可能性をも導き出せればと思っている。そうして、スタートから転機、また、そこに繋がる今において地理的、時系列的、精神的および感情的に異なりつつも重なりあってきた、自身の表現や方法論の移り変わりを検証したいと思う。それはつまり、写真の啓蒙的な原点に立ち返ることでもある。イメージのめくるめく時代、真の意味において自在な境地へと少しずつでも近づき、自分と写真との関係が堅固に結びついていくことを期待したいと思う。

「還流・帰還 ― 沈昭良写真展」についてより抜粋
沈昭良(シン・ショウリョウ) 写真家・華梵大学教授

★沈昭良と最初に会ったのは2004年。写真集《映像・南方澳》を見せてもらった。そこには台湾南部の漁港とそこに暮らす人々の生活と伝統文化が写り込んでいた。'06年、新たなシリーズ「STAGE」を、韓国の東江国際写真フェスティバルで見て、あることに気がついた。彼の作品を見ることで台湾にどんどん興味が湧くのだ。実際にこの舞台車を見てみたい。このステージで繰り広げられるショーを見てみたい。こんな文化のある台湾とは一体どんな国なんだと。日本から離れて、異国の地で見たせいだろうか。その後「STAGE」は、世界中の美術館やギャラリーで展示紹介され、人々の目に触れることになった。多分多くの人が台湾という国を頭に思い浮かべたことだろう。

彼は、'91年に来日し、東京で写真を学んでいる。「テレビのニュースで築地を知って、庶民の暮らしと働いている人たちを見たかった」と、'93年に初めて築地市場を訪れ撮影を始めた。'95年に帰国してからも来日のたびに通い続け、'10年にその十数年の写真をまとめた《築地魚市場》を出版。このシリーズは、自分の「写真の原点」で、長期に渡る取材の中で自身の「写真の成長が1番見える作品」だという。当初は、東京に暮らす住人としても築地を見ていたが、撮影の後半は、台湾に戻り、ジャーナリスト、台湾人としての視点に変わっていく過程も写り込んでいるのかもしれない。そして、この《築地魚市場》を見ているとどうしても先の写真集《映像・南方澳》が頭に浮かんでしまい、台湾と日本との比較を始めてしまう。

2年程前、突然、彼から「漂流」のイメージがSNSで送られてきた。それを見てとても驚いた覚えがある。ドキュメンタリー的な手法で、ストレートにテーマを追いかけてきたそれまでの彼の作風とは異なったからだ。「漂流」は示唆に富んだ、隠喩的な作風だ。台湾人のアイデンティティや歴史、台湾の抱えている課題を想像せざるをえない。

今回の沈昭良の写真展「還流・帰還」では、彼の写真の原点ともいえる「築地魚市場」に始まり、「STAGE」、新作「漂流」が紹介される。多分、私と同じように、多くの人が台湾という国を頭に思い浮かべながら作品と向き合うことになると思う。しかし、最後には、台湾という一国のことのみならず、これから我々はどこにいくのか、人類の未来を問われていることにも気づくはずである。それだけ世界はグローバル化が進み、共通の課題を抱えていることを表そうとしているのかもしれない。ギヤが一段あがっている。

文｜菅沼比呂志 / 武蔵野美術大学 教授

★「一度移動を始めた人は、一本の線になる。」常に移動をつづける旅人とは、糸をもって散歩する人に似る。旅人が前に進むのは、何処かに辿りつくためではない。毎回の出発は、内なる自己へと帰っていくための再起動である。移動のあいだにその生命は、有機的な線のように絡まり合いをみせる。この度の「還流・帰還ー沈昭良写真展」は、台湾の写真家・沈昭良の約30年にわたる活動の軌跡である。ここには、1993年の末より2009年の「築地魚市場」、2006年から2014年の「STAGE」、さらに2015年から2022年の「漂流」といったシリーズに加え、糸のもつれを解くように、回顧的な視点で過去作に応答する新作も含まれている。

漂流 Drifting｜嘉義,台湾 Chiayi County, Taiwan｜2020

この3つのシリーズは、沈昭良が「日本ー台湾」を行き来する中で見つめてきた、ローカル文化の奥底にある生命の姿である。のみならず、それぞれの風土、歴史、政治、経済貿易などが錯綜し複雑に交わるなか、境界をクロスオーバーしながら移動し回帰する視点から、アジアが現代性を獲得するプロセスにおいて放ってきた社会的な眺めを再評価する。例えば、"復返"(return)が曲がりくねりながら帰郷するといった"オデュッセイア"(Odyssey)的なものであり、移動のなかで「忘れられ」「脆くなり」「空白化した」歴史、政治、ないしは生活の記憶を継ぎ足して再構築するものであるならば、"廻流"(backflow)は更にそこに、地形変化や対流・潮汐などの水的要素といった島型の気候形態を暗示し、源流へと回帰することを示唆するものだろう。

展示は、日本の築地魚市場の競り風景といった客観的な日常記録および情感の内的描写から出発する。ここでは、魚市場で繰り広げられる地理的変遷や建築様式、産業形成といった歴史的余韻を内包する細やかなビジュアルに迫ることができる。次の「STAGE」では、お祭りや冠婚葬祭に台湾の娯楽文化がどのように応答してきたか、舞台装置にトランスフォームする機動性をもった交通ツール、そして、華麗なる視覚イメージとパフォーマー/観客の相互作用が示される。さらに「漂流」では、台湾の歴史、地理、政治、エスニック、環境と生態、エネルギーなどの側面と国際的な相互関係を、叙事的な情感とのあいだにおいて、より広い視野でいかに客観的に見つめるかを再考する。これらが輪郭をつくりだした台湾という島国の風景に埋め込まれたあらゆる歴史的メッセージは、一見、平穏に見えるようでいて、じつは身動きが取れずに停滞する台湾の現実を浮き彫りにしていく。

文｜沈裕融(シン・ユウユウ) / 華梵大学 助教授

作家略歴：

1968年、台湾台南生まれ。台湾芸術大学応用メディア芸術修士。大手日刊紙「自由時報」写真記者およびチーフ・コンビナー、中央大学客員アーティスト、台湾芸術大学および台北芸術大学の准教授を兼任、"Photo ONE, Taipei(台北国際写真芸術祭)"の主催統括、第9・10期国家文化芸術財団理事などを歴任。

'01年に初の写真集《映像・南方澳》を発表。その後も《玉蘭》('08)、《築地魚市場》('10)、《STAGE》('11)、《SINGERS & STAGES》('13)、《台湾綜芸団》('16)などの長編写真集を精力的に出版している。'00/'02年そして'12年と「行政院新聞局雑誌写真部門金鼎賞」を3度にわたり受賞。'04年日本「さがみはら写真アジア賞」、'06年韓国「東江国際写真フェスティバル海外作家賞」、'11年度アメリカニューヨーク「Artists Wanted写真年度賞」、'12年アメリカ「IPA国際写真賞プロセクションードキュメンタリー写真部門グランプリ」、'15年台湾「呉三連賞」、'24年「日本写真協会国際賞」など。

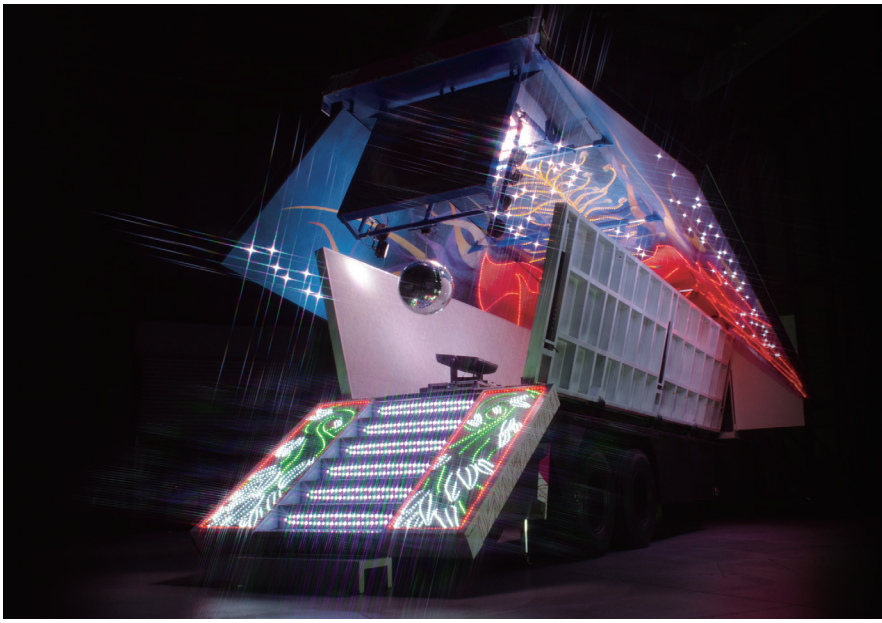
現在は、写真/映像の教育・制作・評論・研究に従事しながら関連する国際交流を積極的に推し進め、ワークショップの開催や展覧会企画も行う。華梵大學写真/VRデザイン学科専任教授。

Photo｜黄郁修 コウ・イクシュウ

会期中イベント

09 / 20 [金]	17 : 30 - 19 : 00	**前夜祭・舞台車ご開帳** 会場：東川町農村環境改善センター駐車場	菊地伸 ｜ 町長 沈昭良（シン・ショウリョウ） ｜ 写眞家・華梵大学教授 やなぎみわ ｜ 美術家・舞台演出家
09 / 21 [土]	10 : 30 - 12 : 00	**開会式** 会場：東川町文化ギャラリー	菊地伸 ｜ 町長 沈昭良（シン・ショウリョウ） 写眞家・華梵大学教授
	14 : 00 - 16 : 00	**トークショー** 会場：東川町文化ギャラリー	沈昭良（シン・ショウリョウ） ｜ 写眞家・華梵大学教授 伊藤俊治 ｜ 美術史家・東京芸術大学名誉教授 沈裕融（シン・ユウユウ） ｜ 華梵大学助教授 菅沼比呂志 ｜ 武蔵野美術大学教授 (司会) やなぎみわ ｜ 美術家・舞台演出家
	17 : 30 - 20:30	**台湾舞台車 Night Event** 会場：東川町農村環境改善センター駐車場	Oki Rekpo ｜ アーティスト 陳建年 ｜ 台湾卑南金曲歌手 Tomoko Saka ｜ 空中パフォーマー Mecav ｜ ポールダンサー やなぎみわ ｜ 美術家・舞台演出家
09 / 22 [日]	10 : 30 - 11 : 30	**ギャラリーツアー** 会場：東川町文化ギャラリー	沈昭良（シン・ショウリョウ） ｜ 写眞家・華梵大学教授
10 / 12 [土]	14 : 00 - 15 : 30	**トークショー** 会場：東川町文化ギャラリー	沈昭良（シン・ショウリョウ） ｜ 写眞家・華梵大学教授 天野太郎 ｜ 東京オペラシティアートギャラリー　チーフ・キュレーター (司会) 瀬戸正人 ｜ 写眞家・清里フォトアートミュージアム 副館長

（50音順、敬称略）



台灣の「舞台車」とは、荷台が全方位に開いて舞台となるステージカーで、カラオケやポールダンスで祭りを盛り上げる「貸し舞台」です。私の所有する舞台車「花鳥虹」は、沈昭良氏の協力のもと、２０１４年の夏に台湾の虎尾にある吉大工場で製造され、高雄港から黒潮に乗って日本に初上陸しました。日本で唯一の舞台車は、巡礼劇「日輪の翼」（原案・中上健次）や、サーカス、文学シンポジウムなど様々なイベントを各地で行っています。

Photo ｜ Yanagi Miwa Stage Project

【主催】 【共催】 【協賛】 （50音順）